

図書館サービスの可能性

利用に障害のある人々へのサービス その動向と分析

小林 卓・野口 武悟 共編

A5・230頁 定価(本体3,800円+税) ISBN978-4-8169-2351-7 2012年1月刊行

すべての人々が利用できる図書館となるには…
各分野の実践・研究を分析し、図書館のサービスの可能性を探る！

- 近年、重視されている“図書館利用に障害のあるすべての人々へのサービス”の実践・研究動向を一望できるレビュー論文集。最近15年間の研究を中心に850件の参考文献を分析・紹介します。
- これまで個別に紹介されてきた実践・研究の取り組みを、幅広い分野にわたって総合的に俯瞰することができます。また、分野別の解題書誌として、2010年代の図書館サービスへの示唆を得ることができます。
- 公立図書館を利用する在日外国人のための多文化サービス、来館が困難な高齢者や入院患者や家族へのサービス、特別支援学校などの学校図書館、点字図書館、おもちゃ図書館、矯正施設生活者の読書環境などの研究と取り組みを文献により紹介。
- 第一線で活躍中の研究者・実務者が執筆したレビュー論文に加え、本書のために書き下ろされた論文を収録、関連文献を展望することができます。
- 著者名から参考文献を引ける「著者名索引」付き。

編者プロフィール

小林 卓 こばやし たく

実践女子大学准教授。京都大学教育学部卒業、東京大学大学院修士課程修了。大阪教育大学専任講師を経て、2007年度より現職。主な著書に、『多文化サービス入門』(2004年、日本図書館協会、共著)『多文化に出会うブックガイド』(2011年、読書工房、共著)など。ホームページ：<http://researchmap.jp/kawakarp/>

野口 武悟 のぐち たいけい

専修大学文学部准教授。埼玉大学教育学部卒業、筑波大学大学院博士課程修了。専修大学文学部専任講師を経て、2008年度より現職。主な著書に、『一人ひとりの読書を支える学校図書館・特別支援教育から見えてくるニーズとサポート』(2010年、読書工房、編著)など。

【目次】

はじめに

- 1章 「図書館利用に障害のある人々」へのサービス
:公立図書館－総論－
- 2章 多様な利用者へのサービス
:公立図書館－各論－
- 3章 特別なニーズをもつ子どもの学びと読書を支える
:学校図書館
- 4章 均質な利用者像を越えて
:大学図書館
- 5章 視覚障害者への情報保障の拠点
:点字図書館
- 6章 患者・家族への情報サービス
- 7章 矯正施設の読書環境と図書館サービス
- 8章 子どもの発達の可能性を伸ばす
:おもちゃ図書館
- 9章 まとめと展望
:すべての人々への図書館サービス
に向けて

あとがき

著者名索引(参考文献)

付 録(マインドマップ)

執筆者一覧

2018.1

お問い合わせは… 日外アソシエーツ 営業局

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名

注文書

図書館サービスの可能性

—利用に障害のある人々へのサービス その動向と分析

定価(本体3,800円+税) ISBN978-4-8169-2351-7

冊



9784816923517

1 章 「図書館利用に障害のある人々」へのサービス

小林 卓

はじめに

第1章とそれにひきつづく第2章では、公立図書館における「図書館利用に障害のある人々」へのサービスについて、1995年1月以降、2011年8月までの文献展望を行う。

平板な文献一覧となることを避けるため、公立図書館については、「1章：総論」と「2章：各論」に分け、特に総論の部分では内容紹介につとめ、各論では文献紹介を主眼とした。レビュー論文を一種の「解題書誌 (annotated bibliography)」とするならば、総論では解題 (annotate) に力を入れ、各論では書誌 (bibliography) に焦点を置いたことになる。1章、2章の「公立図書館」部分の「動向と展望」は、2章末において統合する形でまとめる。

なお、記述の便宜上、文献を分類して書いているが、一般論として「図書館利用に障害のある人々」へのサービスは樹形図状に展開するのが困難な概念であり、総論と各論もそれぞれが交互に重なり合うものであることをお断りしておく。

1. 概説・入門、総論 (個別文献)

1998年から現在までに出版した概説・入門としては、まず学部生がレポートや卒論でとりあげるためには、少し詳しい文献案内のついた『図書館・情報学研究入門』所収の野口武悟の論文¹⁾がよい。なお、類書の『図書館情報学の地平：50のキーワード』は、前書よりも少し一般向けに書かれており、小林卓が「障害者サービス」「多文化サービス」²⁾を執筆している。

図書館情報学を学ぶ学生に
図書館現場の実務担当者に
図書館学研究者に
おすすめします

図書館利用に障害のある人々へのサービスは、本書の2冊の図書は、本書の2冊の自身の
る人々へのサービスの提供経験を基に綴った『本
』⁴⁾と、公共図書館で働く視覚障害職員の会 (な
・見えにくい人も「読める」図書館」⁵⁾である。
ある人、赤ちゃんから高齢者まで「すべての人」
きた山内の記録であり、その対象範囲は、本書の
る。後者は、「公共図書館で働く視覚障害職員の
その結成20周年を記念して、総力をあげて執筆し
の「見えない・見えにくい人」への図書館サービ
かるという過言ではない。

1章をまとめたものであるが、1998年出版の市橋
ってなかに」⁶⁾も、漏らすことはできない。2001
わる」⁷⁾は、体裁的には1998年の全国調査の最
なっているが、障害者サービス全般への提言も含
いる。

文献ではないが、図書館利用に障害のある人々へ
、シンポジウムや集会の記録が報告書や連載とし
書館利用に障害のある人々」へのサービスが雑誌
れることが多い。シンポジウムや集会の記録とし
障害ってなんだろう」⁸⁾、をはじめとして、『みん
れた「連続学習会 障害について考える：国際障
がかりに」⁹⁾などが、代表的なものである。雑誌

の特集号は、各論についてのものはそちらに譲るが、図書館利用に障害
のある人々へのサービス全般の特集号としては、『現代の図書館』の「特

編者・あとがきより
抜粋

…本書は「レビュー論文集」という位置づけであるが、アイザック・ニュートン(Isaac Newton)の有名な言葉に「巨人の肩に乗れば遠くが見える」というものがある(正確にはニュートンの前にもこの言葉を使った人がおり、ニュートンの言葉も直訳すると少しニュアンスが異なる)。しかし、私たち多くのものにとっては、「巨人の肩」に上るための梯子が必要である。それがレビュー論文の意義だと思うが、図書館情報学の世界は「紺屋の白袴」というか、情報の圧縮・二次生産に価値を見いだす学問でありながら、自身の分野についてこの種の発行物が相対的に少ない。本書がこうした「梯子」のひとつになれば幸いである。また、最初に『図書館界』に論文を掲載したとき、日本障害者リハビリテーション協会の野村美佐子とメールを交わしていて、「これらのサービスは、文献には現れない活動をしている人がたくさんいる。そうした人たちの仕事を表現できないのは残念である」といっ

た言葉をもらった。全くその通りであり、その意味で本書は「文献レビュー」という限界を抱えている。今後、当事者の発言やオーラルヒストリーなどで、広くその活動が知られ、未来への梯子がつけられることを強く願う

～(中略)～

かつて、石井敦は1968年の「日本における民衆運動と図書館」で、「現実の桎梏から脱し、新しい社会をうちたてようとする民衆の社会運動が展開されたところには、必ずといってよいほど、図書館＝学習のための書施設の要求は存在していたのである」と書いた。「図書館利用の障害」＝「現実の桎梏」としてしまうのは、今日的観点からは一面的ではあるが、資料・情報の要求は彼女ら彼らこそ切実である。「図書館」はその要求に応えているか、あるいは彼女ら彼らから見放されていないか、その在り方が問われている。…